

人生径路の個性を捉える TEA (複線径路等至性アプローチ)

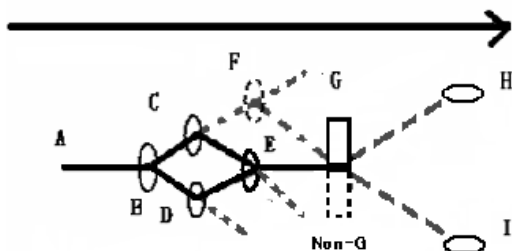
—初心者には最初の手ほどきをします；経験者には個別相談をします—

講師：サトウタツヤ (立命館大学) + 渡邊芳之 (帯広畜産大学)

この講習では、参加者がお互いに簡単なテーマの聞き取りを行うことによって、TEM (複線径路等至性モデル) の初歩を学ぶ。既にこの手法でデータをとって分析をしている人の個別相談にも応じる予定である。

TEM は、人間を開放系として捉えた上で、人間の発達を時間と場所との関係で捉えること、特に文化の影響を排除するのではなく重んじることを目指す。

人間の発達には出来事 A、B、C が、ビリヤードの玉突きのように直線的因果で表現されるのではなく、また、初期状態で後の状態が予測できるのではなく、ある到達点 (等至点と呼ぶ) に至る径路が複数あるという考え方をとる。この複数の径路の結節点となる出来事を概念化するために、等至点や分岐点などの概念ツールを用いる。



B=大学入学；C=インターン；D=怠学
E=大学卒業；F=就職
G=大学院入学；NonG=大学院入学せず
H=最善の見通し；I=最悪の見通し

上の模式図は大学院入学を等至点とした例である。B (大学入学) から G (大学院入学) には多様な径路がありうるし (大学院入学しない選択もある)、社会人になってから大学院という径路の人もある。そして G において様々な未来展望を持ちながら生活していくであろう。

複線径路等至性モデルを描くには、等至点となる現象を同定する必要がある。これは、研究者が研究した

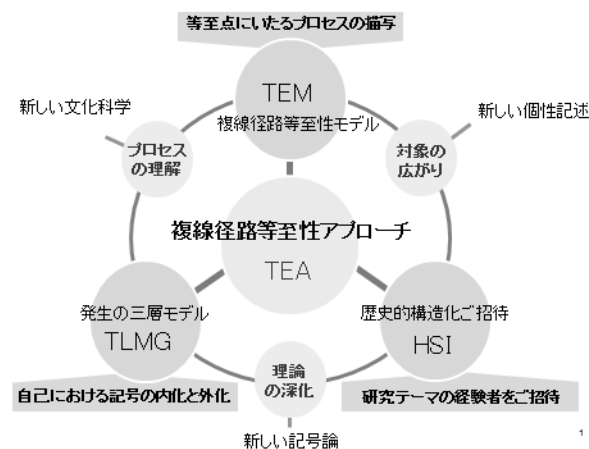
いこと、である。大学に入る、でもいいし、結婚、でもいいし、人はどのように**をするのだろうか？というようなことを設定する。そして、その経験をした人に話を聞いてみる。その話を TEM として描いていくのである。

すると新しい選択枝が発生する時点が分岐点として同定できる。分岐点においては、ある選択をすべきか、他の選択をすべきか、ということについて、自己内対話が起きるかもしれないし、様々な圧力がかかるかもしれない。誰かが応援してくれるかもしれない。それらの力も描いていくのである。

今回は、以上のような TEM の基本的な技法について講習を行う。

なお、私たちは現在、TEM (複線径路等至性モデル) を中心に、HSI (歴史的構造化ご招待)、TLMG (発生の三層モデル) を総合的に理論化した TEA (複線径路等至性アプローチ) という立場を取るに至っている (安田・サトウ、2014)。

講習の最後にはこの大きな枠組についても最後に説明してみたい。



引用文献

安田裕子・サトウタツヤ (編) 2014 ワードマップ TEA (複線径路等至性アプローチ) 新曜社